

日かな

昔

たどたどしい信仰記

-2

6

15

幼い不安²行方

外⁴松¹住¹夫¹

女¹寮¹

私は明治三十五年に生まれた。またその時
 代にはお化や幽霊がたくさんゐた。狐や狸も
 化けたし、実際に化かされた人もゐた。雨の
 夜には火の玉が飛んだし、外ヶ辻の化け灯笼
 には大入道が現れた。白晝、村の中を子捕り
 がさまよつてゐるともいふし、鎮守の森の杉
 の木に五寸釘が打ち込まれてゐたとも言ひ融
 さまごまな自然の現象も幼年の私には不安
 だった。白雲が割裂一の形を崩して行く中空
 を見上げながら、その広さ pensando 思つては、私
 は得¹体¹の知れぬ淋しさに襲はれた。雨音の中
 に鳴り続いてゐる半鐘の音にも、今にも堤防
 を破らうとする濁流を思つては、私は言ひや
 うのない恐怖を覚えた。

しかし¹私¹が何より恐しかった¹は、春秋の奪
 の彼岸会に村の禪寺に掛けられる地獄絵で